

広島市小社研会報

令和2年8月・9月・10月・11月 第263号

研究主題

社会をみつめ、未来を問い続ける社会科教育の創造
—教材の意味からせまる授業づくりを通して—

先生方におかれましては、夏休み明け以降慌ただしい日々が続いておられることと思います。春に予定していた様々な保健行事の実施、感染症対策を講じながらの運動会、野外活動、修学旅行、校外学習の実施等々。授業時間数の確保、児童の学力定着に向けた取組…。「息つく間もない」とはこのような状況を指すのでしょうか。それでも我々は目の前の児童の笑顔に支えられながら、前に進んでいます。広島市小社研のネットワークも存分に活用しながら、この難局を皆で乗り切っていきましょう。

さて、今号も矢賀小学校の校内全体研修会(昨年度授業研究)での授業者の先生方(高学年)の感想を掲載いたします。あわせて、今年度より広島市教育委員会指導第一課指導主事(社会科担当)になられた権藤義則先生にも寄稿いただきました。

ぜひ皆様にもご一読いただき、今後の社会科学習の参考としていただければと思います。

新学習指導要領全面実施にあたって（社会科新担当あいさつ）

広島市教育委員会指導第一課 指導主事 権藤 義則

本年度より教育委員会指導第一課の指導主事を務めさせていただくことになりました、権藤です。どうぞよろしくお願いたします。昨年度まで、社会科部会員として授業をさせていただいたり、幹事をさせていただいたり社会科部会の皆様には大変お世話になってきました。今後は、少しでも社会科部会のお役に立てるよう尽力して参ります。

先生方におかれましては、新型コロナウイルス感染拡大による臨時休業や学校再開後の対応等で、非常にお忙しくされており、また、新型コロナウイルス感染症対策を講じながらの学習形態等の工夫を求められ、大変なご苦勞をされていることと思います。

このような状況下で、本年度行われる予定だった矢賀小学校での県大会は中止を余儀なくされてしまいました。原校長先生をはじめ矢賀小学校の先生方、これまで多くの指導助言をくださった広島大学大学院の木村先生、大会に向けてお力を貸していただいた研究部の先生方におかれましては、非常に残念な思いをされていると拝察します。しかし、県大会に向けたこれまでの取組や研究成果は、今後の社会科部会の財産となることと思います。

さて、本年度は、新学習指導要領の全面実施の年です。社会科では、各学年の内容について、精選・整理・組み換えが行われ、「地理的環境と人々の生活」、「歴史と人々の生活」、「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の3つに区分されるようになりました。

内容については、例えば、これまで第3学年及び第4学年に示されていた内容(4)について「地域の安全」は3年生、「自然災害」は4年生、と学習する学年が明確に分けて示されたり、第5学年の内容(4)について、大量の情報の活用に係る学習を取り扱うこととなったりしたことが主な変更点としてあげられます。

また、今回の改訂では、各教科で「見方・考え方」を働かせることが謳われており、小学校社会科においては、見方・考え方を「社会的事象の見方・考え方」としています。これは、「社会的事象の特色を考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする際の『視点や方法(考え方)』であり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」と整理されています。

さらに、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力が三つの柱に整理されたことにより、評価についても、従来の4観点の評価から3観点の評価へと整理されました。学習評価の進め方としては、国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する資料」に以下のように示されています。

- 1 「単元の目標を作成する」
- 2 「単元の評価規準を作成する」
- 3 「指導と評価の計画を作成する」
- 4 「授業を行い、観点ごとに総括する」

留意点や実践例についても詳しく記載されているので、ぜひ確認してみてください。

先行きが不透明な厳しい状況が続きますが、先生方のお力があってこそその社会科部会だと思っています。研究主題「社会をみつめ、未来を問いつける社会科教育の創造」を基にした社会科の授業研究が一層進むことを期待するとともに、今後とも、多方面で先生方のお力を発揮していただけることを願っています。

矢賀小学校 校内全体研修会(昨年度授業研究)授業者感想

5 学年「自然災害を防ぐ」

広島市立矢賀小学校 教諭 黒木 祐

本単元では、日本は自然災害が起りやすい気候や地形で、いつ、どこで災害が起こるか予測しにくいという事実から、「自然災害がいつ、どこで起こるか分からない日本で生活するわたしたちを守るにはどうすれば良いのだろうか。」という単元を貫く学習課題を設定しました。子どもたちの予想の段階では、「自助」「共助」の視点が多く挙げられていましたが、学習を進めていく中で、国や県の災害への対策を学んできたことで、「公助」の大切さについても気付かせることができました。また、単元の後半では、各地で大きな被害をもたらした「西日本豪雨災害」について取り上げました。広島市は、過去に大きな土砂災害が発生しており、それに対してハード面、ソフト面の両面から様々な対策を行っていることを子どもたちも学習を通して学んだ上で、「西日本豪雨災害」の被害状況を知った時、子どもたちからは自然と「なぜ対策をしても被害がなくなるのか」という疑問が生まれてきました。それによって、現代の日本の災害対策の課題について、自分事として考えることができたのではないかと思います。

また、今回授業をしてみて学んだことは大きく二つあります。

一つ目は、資料の精選です。今回は、写真やグラフだけでなく、文書資料も多く取り入れました。しかし、文章が長くなったり、取り上げる内容が多くなったりすることで情報量が多くなり、読み取ることができない児童の姿も見られました。教材研究を進めていく中で、「こんなことを知ってほしい。」「これについても分かってもらいたい。」などの思いが強くなり、自然と資料の量は増えてしまいました。しかし、能力以上の要求をすると、中には学習に対する意欲を失ってしまう児童もあり、資料を精選していくことがいかに大切であるかを体感することができました。しかし一方で、資料の読み取りを積み重ねていくことで、複数の資料から関連付けて考えたり、大切なキーワードを読み取ったりすることができるようになった児童の姿も見られ、精選と同時に読み取る力を育てていくことも社会科の授業を行う上では必要になってくるということも感じました。

二つ目は、「問い」に対する明確な「答え」を授業者が持つことの必要性です。今単元の「いかす」場面では、「様々な対策が進められているにも関わらず、なぜ災害による被害がなくなるのか」について考えました。児童は資料から読み取ることで、「公助の限界」だけでなく、「正常性バイアス」など、人々の意識による課題についても捉えることができていました。しかし、「まとめる」場面では、それらの言葉をうまく組み合わせることができず、授業者が主体となって長い文章でまとめてしまい、上手く児童に落ちなかったように感じました。指導・助言をしていただいた木村先生からも、「まとめは短くシンプルな方が良い」ということも教えていただき、改めてどのようなまとめを書けばよいのか、どのような展開をすることで「答え」を見出すことができるのかについて教材研究し、明確な「問い」を見出すことの大切さを実感しました。教材研究を進めていくと、たくさんの知識が増え、方向性を見失ってしまうこともあります。そんなときは、改めて「問い」をはっきりとさせ、児童のどのような姿を目指すのかをしっかりと精選することも意識していきたいと思います。

6 学年「世界に歩みだした日本」

広島市立矢賀小学校 教諭 前田 嗣巳

今単元では、矢賀村出身であり、金属物理学の研究・発明において日本国内及び、世界にも大きな功績を残した「増本量博士」を、日本の国際的地位の向上に貢献した人物の一人として取り上げました。増本博士については、学校に胸像が設置されていたり、過去に何度も図書を寄贈していただいたりと、子どもたちは存在については知っていました。しかし、実際に増本博士が「何をした人なのか。」「どのようなことを研究したのか。」などについて知っている子どもたちが少ない実態もあり、教材化することで、より増本博士を身近に感じさせることができないかと考え今回挑戦をしました。増本博士について書かれている文献はほとんどなく、思うように教材研究を進めることができず、十分な開発ができたとは思えませんが、授業を通して子どもたちが増本博士に対して興味を持ったり、親しみを感じたりしてくれたことは大きな成果として感じています。

また、今回の授業をして学んだことは大きく二つあります。

一つ目は、「個人思考」の大切さに気付けたことです。今単元では、毎時間資料等による読み取りを個人で行い、全体で共有する活動を取り入れました。その際に、確実に自分の考えを持つことができるよう、ワークシートを工夫したり、個別に声かけをしたりすることを積極的に行いました。それによって、グループ交流では自分の考えを全員が伝えることができおり、お互いの考えを交流し合うことで、課題に対する答えを子どもたちが主体的になって見出している姿も多く見ることができました。

これまで、授業を進めることを焦りすぎて十分な個人思考の時間を確保できていないこともありましたが、今単元を終えてみて、いかに個人思考の時間が子どもたちの学びにとって大切であるのかを改めて感じる事ができたように思います。しかし、資料の精選やワークシートの形式などについては、多くの改善点もあったため、今後はその部分についても追及していきたいと思います。

二つ目は、時代の見せ方を工夫することの大切さです。私自身は、増本博士を日本の国際的地位の向上に貢献した人物の一人として捉えて単元を構成しましたが、授業を終えて木村先生からは、「もっと増本博士に焦点を当ててみても良いのではないか。」という助言をいただきました。今単元では、国の政策や日清・日露戦争といった部分を中心に焦点を当ててしまったため、富国強兵ばかりに子どもたちの視点がいつてしまい、幕末の蘭学や医学の影響などについては捉えることが不十分となってしまいました。

しかし、もともと百姓であった増本博士が大学に行き、研究をできたのは「学制」の発布も大きく関わっており、それによって多くの偉人が生まれています。つまり、少し前の時代では考えられなかったことがなぜできたのかを追究することでも、その時代をしっかりと見つめることができるということを教えていただきました。

「その時代はいったいどのような時代なのか」を子どもたちが学びを通して考えることができるよう、歴史的事象の原因と結果についても焦点を当てて単元を構成していくことも今後は意識していきたいと思います。

社会科同好会のご案内

年間を通して、社会科授業づくりに関心のある社会科同人が集まり、社会科同好会を開催しています。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、同好会の開催を延期しておりましたが、9月より再開し、現在2回実施しています。

今後も11月と年が明けて1月に開催を予定しておりますのでぜひご参加ください。慌ただしい毎日のため社会科の授業づくりについてじっくり考えたり、教材を開発したりする時間はなかなかとれないのが現実かもしれません。そのような中、社会科授業について語り合う機会を、みなさんと共有していきたいと考えています。社会科を長く深く究めてこられたベテランの先生方から、日々の社会科授業に悩んでおられる先生方まで、共に学び合う場にしてまいりましょう。同好会に入っておられない方の参加も大歓迎です。

講師として広島大学大学院教育学研究科永田忠道先生をお招きし、交通の便のよい「三篠公民館」で開催しています。たくさんの先生方のご参加をお待ちしております。

今後の計画は以下の通りです。各回が近づきましたら、各校に案内をお送りいたします。

※【第1回】【第2回】実施済み

【第3回】令和2年11月27日（金）19:10～20:45

発表者：黒木 祐 教諭（矢賀小学校）

【第4回】令和3年 1月29日（金）19:10～20:45

発表者：前田嗣己 教諭（矢賀小学校）

場所：広島市三篠公民館 （住所：西区打越町10-23 電話：237-3077）

【あとがき】

先日学区を自転車で走っていると、不自然な緩やかなカーブがあることに気がつきました。郷土資料で調べてみると、昔学区に競馬場があり、当時非常に賑わっていたことが判明しました。

フィールドワークも足で稼いで情報を得る有力な手段ですが、地域に関する文献を眺めてみると意外な発見があったり、新たな情報を仕入れたりできるかもしれません。

今回矢賀小学校の黒木先生や前田先生が教材研究の大切さを書いておられますが、アンテナを広く張り、情報を多く集め、それを精選し、深く教材研究すること、これが社会科の授業づくりでは基本ですが、やはり重要だと感じています。

広島市小社研事務局次長 三好 崇之
